

2013.06.25：平成25年\_文教常任委員会（第1号） 本文

○宇野 裕委員 4点伺いたいと思います。

1点目は、新しい総合計画、県全体の総合計画原案が示されたわけでありましたが、これは9月議会に向けて提案をするということで答弁があったわけでありますが、この総合計画を見据えて、県教委として、今後4年間、どのように取り組んでいくのかお答えをください。

○委員長（臼井正一君） 石橋教育政策課長。

○説明者（石橋教育政策課長） 新総合計画につきましては、くらし満足度日本一を基本理念に取り組んできたこれまでの実績をベースとして、千葉県をさらに発展させるため、現計画を改定しようというものでございまして、教育施策につきましても、これまでの実績を踏まえつつ社会の変化に適切に対応するため、現在の教育振興基本計画との整合性を図りながら、今後4年間に実施することが必要な新たな取り組みを盛り込んでいるところでございます。具体的には、当面する教育課題や今後の教育のあり方について幅広い視点から意見を伺います仮称千葉県の教育に関する懇話会の設置、あるいは学習サポーターの派遣等による学力向上に向けた取り組み、道徳教育やいじめ防止に向けた取り組みのさらなる充実、ちばアクアラインマラソンの開催などについて記載したところでございます。今後とも社会環境の変化を踏まえまして、教育課題に総合的、計画的に対応し、教育立県ちばの実現に向けて取り組んでまいりたいというふうに考えております。

○委員長（臼井正一君） 宇野委員。

○宇野 裕委員 ありがとうございました。具体的な今御説明をいただきました。その中でちょっと要望なんですけども、仮称千葉県の教育に関する懇話会の設置、メンバーはこれからお決めになるというふうに思いますが、要望なんですけど、中に県議会の議員を入れてもらえるようなことを少し考えてもらいたいというふうに、これは要望です。

それから、アクアラインマラソンについては1回やって、総括的な評価から言えば大成功だったと思いますが、いろいろな点で見直さなきゃならない点がたくさんあったと思います。その辺のことを踏まえて、2回目はさらに評価をいただけるように頑張っていただ

きたいと、これは要望でございます。

次の質問なのですが、現在、小中高で県教委が管理してる授業内容のことについて伺いたいんですが、魅力ある授業というのが非常に私は大事であろうというふうに思ってます。今、テレビで予備校のコマーシャルがよく出ておりますが、大体魅力ある授業になると競争が激しくて教室に入れない、1人で100人、200人の生徒、予備校生を教えていると。もっと広がっていけば、衛星放送で何千人の生徒を教えるような授業もあるように聞いておりますが、やはり魅力ある授業というのが私は大変大切だろうというふうに思っております。別に予備校の先生のまねしろということではなくて、県教委の目の届く範囲で現場の先生方の授業内容、これについていろいろな取り組みされてると思いますが、さらにブラッシュアップするために、この魅力ある授業というのはどういうふうに確立していくのか。意気込みも含めてお答えいただければありがたいと思います。

○委員長（臼井正一君） 小川指導課長。

○説明者（小川指導課長） 宇野委員御指摘のとおり、魅力ある授業ができる教員の資質向上を図っていくという点は非常に重要であると考えておりました、本県におきましても、毎年、ちばっ子学力向上総合プランというのを策定しておりますが、その中の一番大きな、5つ柱があるうちの1番目の柱に教師カトップチャレンジプランということで、授業力向上の視点からさまざまな施策に取り組んでるところでございます。例えば千葉県教職員研修体系に基づいて、法律で定められた初任者研修や10年経験者研修のみならず、例えば5年経験者研修などを導入するなどして教員全般の資質向上にも努めております。また、まさに御指摘いただいた魅力ある授業という点につきましては、魅力ある授業づくりの達人認定事業というものも行っておりました、魅力のある授業をする方を認定をした上で、さらには、その取り組みをさらに普及をしていくというような取り組みも行ってございます。こういった取り組みをさらに進めまして、教員の資質向上を今後もさらに進めていきたいと考えております。

○委員長（臼井正一君） 宇野委員。

○宇野 裕委員 魅力ある授業というのは、要は生徒が眠らない授業というか、あの先生の授業だったら、ほかの授業は寝てても、この先生の授業は起きて頭に入るなとか、嫌だった科目があんな先生になったら急に好きになるとか、そういうことだとは思うんですね、

私なりに解釈するに。その辺の生徒から人柄の人気というか、授業内容、これ、リンクして思うんですけども、その辺のところの生徒の評価というのは県教委としてやってるんでしょうか。生徒の評価と言ったら失礼ですけど、生徒から見て魅力ある授業というのを生徒から聞いたことがあるのかどうなのか。その辺、ちょっと教えていただけますか。

○委員長（臼井正一君） 小川指導課長。

○説明者（小川指導課長） 生徒からの意見というものは、申しわけございませんが、把握はしてございません。

○委員長（臼井正一君） 宇野委員。

○宇野 裕委員 そうすると、県教委から見て魅力ある授業をやってる先生というふうな位置づけ—達人も含めて、そういうふうにつけてよろしいんでしょうか。

○委員長（臼井正一君） 小川指導課長。

○説明者（小川指導課長） 現在の授業としては、そういうことでございます。

○委員長（臼井正一君） 宇野委員。

○宇野 裕委員 要望ですけども、私は、基本的には先生の指導というのは絶対で、先生に従うという構図はこれからも維持していくべきだと思います。逆に言うと、生徒にへつらう必要は全くありません。ただ、生徒の匿名でもいいので、この先生の授業はおもしろいねとか、そういうような目安箱みたいなものを生徒に書いてもらうことも必要なのかなと思いますので、これは要望とさせていただきます。

3点目ですが、今、県教委とすれば、社会の最小単位は何であるかということはどういうふうに教えてるのでしょうか。

○委員長（臼井正一君） 小川指導課長。

○説明者（小川指導課長） 県教委としましては、御指摘の点は家族についてのことだと認識しておりますけれども、家族の大切さといったものにつきましては、家庭科の授業でございませつか、あるいは道徳の授業の中で、各学校において、そういったことの大切さを教えるための教育がなされているものと考えております。

○委員長（臼井正一君） 石橋教育政策課長。

○説明者（石橋教育政策課長） 先生の先ほどの御質問で、生徒からの評価という御質問あったと思うんですけども、いわゆる学校評価ということで、保護者からのアンケートということで毎年とっておりまして、その項目の中には、学習指導について満足であるとか、おおむね満足であるとか、そういう回答をした保護者ということでとってるものはございますので、参考までに。

○委員長（臼井正一君） 宇野委員。

○宇野 裕委員 ちょっと答弁はつきりしなかったんですけども、社会の最小単位は何だというふうに教えてますか。

○委員長（臼井正一君） 小川指導課長。

○説明者（小川指導課長） すいません、ちょっと今手元に資料ございませんが、私が申し上げたのは、そういった宇野委員がおっしゃったことは家族という単位のことかと私は個人的に解釈をいたしまして、家族の大切さといったようなものでございましたら、家庭科の授業であったり、道徳の授業の中で教えられてるものというふうに考えております。

○委員長（臼井正一君） 宇野委員。

○宇野 裕委員 私も余り勉強は好きでもない、勉強も余りできなかった生徒なんですけど、子供のときに社会の最小単位は家族であるというふうに教えてもらったような気がするんですよね。ところが、今の風潮は、社会の最小単位は個人であるというような風潮があるように思います。ですから、その辺のところは、社会の最小単位は家族であるというような教育をしていただければありがたいなと、これ、要望でございます。

それで、今、課長さんからお答えをいただきました家族の大切さ。家庭科の授業だとか、いろいろな場面、あるいはホームルームだとか、いろいろなところで先生の思いというのは子供たちに伝えていただいていると思いますが、家族の大切さというのを子供たちに機会あるごとに指導していただいていると思いますが、一番大切なのは家庭教育だと私は思っておりますが、学校教育の中で家族の大切さというのをどのように指導しておられるか、もう一度お答えいただけますでしょうか。

○委員長（臼井正一君） 小川指導課長。

○説明者（小川指導課長） 繰り返して恐縮ですが、家庭科の授業であったり、道徳の授業の中で教えられてるものと考えております。

○委員長（臼井正一君） 宇野委員。

○宇野 裕委員 内容について言うと深くなってしまうので、できれば、なぜ大切なのかと。子供のときに当然なんだということの紋切り型ではなくて、家族の大切さというものをぜひ具体的な事例とか、いろいろなものを入れて教えていていただきたいと、これ、要望でございます。

次に、最後の質問をさせていただきたいと思います。日本の人口は、このままいくと大変減っていくということはいろんな場面で議論をされております。2050年ごろには推計で9,500万人ぐらいになるだろうと。100年後には5,000万人切っちゃうだろうと。さらに、もう100年ぐらいたつと、日本の人口はほぼないに等しいということに、今の推計ではそういうふうに言われております。そうならないことを期待しつつも、そういう数字を突き

つけられると非常にショックを受けるわけであります。そんな先のことまで考えなくてもいいんじゃないかと言う人もいるかもしれませんが、そうあってはならないと私は思っております。

そういう中で、子供を産み育てること、これ、非常にお金がかかるとか、大変な思いがあるとか、夫婦は苦勞するんだとか、その議論はよくわかります。しかし、子供を産み育てることの大切さと喜びですね。つらいこともたくさんありますけども、産み育てることの大切さと喜びという、子供を手にとったときの喜びとか、自分の子供が生まれたときの喜び、出産の喜びとか、そういうような、子供を育ててだんだん成長していく過程を見る親の喜びとか、そういうことをいろいろな機会を通じて教育現場で教えていただいているとは思いますが、今、そういうような教育をどのように県教委として教員の皆さんに指導しているのか。わかる範囲でお答えいただければありがたいと思います。

○委員長（臼井正一君） 小川指導課長。

○説明者（小川指導課長） 同じような答弁で恐縮ですが、子供を産み育てることの大切さといったことでしたら、これも家庭科の授業の中で教えられるような内容になるかと考えております。そのほか、聞いてるところでございますと、例えば市町村の児童福祉部局などの呼びかけに応じて、各学校が児童福祉部局と連携した形で、子供たちにそういった子育て体験のような講座のようなものを協力してあげたりとか、そういった事例はあるというふうに聞いておりますので、そういった協力について県立高校などに呼びかけるようなことは可能であるかなというふうに考えております。

○委員長（臼井正一君） 宇野委員。

○宇野 裕委員 要望ですが、ネガティブな情報が相当あふれてます。出産に対するネガティブな情報、それから子育てに対するネガティブな情報。子供たち、年齢に合わせて出産の喜びとか子育ての大切さ、喜びとか、自分が親になったとき、そういう子供のときにポジティブな情報というか、思いというものをぜひ年齢に応じて子供たちに教えていただけるような、そういう千葉県の教育をぜひ今度の総合計画をつくる段でどこかに盛り込んでいただければというふうに私は思います。これは要望とさせていただきます。

以上です。